

## 欧州に学ぶ脱・無縁社会への挑戦 第1回 スウェーデンに学ぶ～シニア劇場による団地再生

2012.03.12

プラチナ社会研究センター 主任研究員 松田智生

「絆」という言葉が2011年を表す漢字であったが、東日本大震災をきっかけに、今ほどコミュニティでのつながりが重視されている時期はないと言えよう。

この連載では『欧州に学ぶ脱・無縁社会への挑戦』として、昨年筆者が現地調査した欧州の先駆的な事例を紹介し、コミュニティ再生へのヒントとしたい。

第1回は、『スウェーデンに学ぶ～シニア劇場による団地再生』だ。

### ■シニア劇場とは

スウェーデン マルメ市は、デンマークとの国境にある人口30万人の港町だ。

かつて造船業で栄えたこの街は、近年は新エネルギーやITの街と変貌し、産業構造の転換だけでなくオールド・タウン問題に対しても新たな取り組みを行っている。

マルメ市にあるアウグステンボリ地区での団地再生を見てみよう。(写真1)

再生のハード面では、屋上緑化、ごみのバイオガス化などが特徴だが、カギはソフト面であり、団地内にある「アウグステンボリ劇場」というシニアが歌い踊る小さな劇場だ。

写真1 改装された団地



当地でも独居老人や高齢者の孤立死は大きな社会問題になっており、独居老人の見守りコストは行政側

にも大きな負担になっていた。そこで考えられたのが高齢者の社会参加を促すシニア劇場だ。筆者が訪問した時には、93歳の女性が歌い、観客は笑顔で彼女に声援を送りとても和やかな雰囲気であり、高齢者の引きこもり予防、団地の賑わいに大きく貢献している。ちなみに公演は無料、公演者もボランティアで無報酬だ。50～60人が入れれば満席の劇場だが、今では年間2千人の観客がここを訪れるという。(写真2)

写真2 シニア劇場案内



マルメ市役所のスタッフは語る。

「団地再生で重要なのは、ハードよりソフトです。いかに建物や設備をリニューアルしても、そこに住む人が幸せでなければ意味がありません。シニア劇場のような社会参加の場づくりが、コミュニティの維持と活性化のために大事なのです。また、近々子供劇場も作る予定です。高齢者だけでなく多世代の交流が地域全体の活性化になります。」

## ■日本への示唆

### (1) 対処から予防の視点へ

独居老人や孤立死は国を問わず深刻な問題だが、行政が高齢者の見守りにかけるコストは大きな負担になっている。大事なのは問題が深刻化してから対処するのではなく、顕在化する前に先手を打つ予防の視点だ。シニア劇場は、社会参加により高齢者の引きこもりを未然に防ぐ仕掛けとなっている。

### (2) 部分最適から全体最適の視点で

シニア劇場は市の住宅公社が運営し、観客は無料、舞台に立つシニアもボランティアで無報酬だ。公演の演出家の報酬や運営費はかかるので、事業自体は赤字であるが、団地全体としてみれば、引きこもり

の予防、寝たきりやうつ病の減少による医療費の抑制、集う場による団地の活性化や消費増加等、社会的にも経済的にも有益である。得てして自治体では、都市計画、住宅、商工、福祉など各部門の縦割り志向になりがちだが、マルメ市では、事業単体の部分最適でなく全体最適での視点が行政に浸透している。

### (3) 高齢者の高次欲求の充足

「マズローの欲求の5段階説」では、人間の欲求は生理⇒安全⇒親和⇒承認⇒自己実現となっているが、高齢社会というと、ともすれば介護や見守り等、生理や安全といった基礎的な欲求充足に目が行きがちだ。しかし今回のシニア劇場は、劇場を通じて誰かとつながる「親和」、歌や劇で誰かから認められる「承認」、自分の晩年に何かに夢中になる「自己実現」といった高次の欲求を充足させる場となっている。

団地というコミュニティにおいて高齢者は弱者やコストでなく、担い手であり資産という高齢社会の新たなモデルと言えよう。

#### ■おわりに 一步踏み出す勇気

スウェーデン人の国民性は、日本人と非常に似ていて、勤勉で真面目、組織的だが控え目で内気、うつ病も少なくないと言われる。今回のシニア劇場がアメリカの話であればともかく、日本と似て控え目な気質のスウェーデンで行われていることは注目に値する。(写真3)

写真3 地元から選抜されたシニア



内気な気質のスウェーデン人が出来るなら日本人でも！

この事例をみて、「日本では難しい」、「当地では事情が違う」と言うことは簡単だ。しかし出来ない理由を幾ら理路整然と並べても、問題は何も解決しない。そして、この間にも高齢者の孤立という問題は一

層深刻になっている。

今の日本に求められているのは、勇気を持って一步踏み出し、脱・無縁社会への挑戦をすることなのだ。